

非慣性系

中嶋 慧, 松尾 衛

October 6, 2020

Abstract

この記事は、『一般ゲージ理論と共変解析力学』の web 付録の 1 つであり、非慣性系について解説する。

Contents

1	非慣性系	1
1.1	設定	1
1.2	非慣性系での運動方程式の、ラグランジアンからの導出	4
1.3	非慣性系での計量	6
1.4	非慣性系での運動方程式の、一般相対論からの導出	7
1.4.1	コリオリの力以外の慣性力	7
1.4.2	コリオリの力	8
1.5	K_0 で $h_{\mu\nu} \neq 0$ の場合	9

1 非慣性系

非慣性系について議論する。ただし、粒子の運動速度は光速度に比べて十分小さく、重力が弱い場合に限る。また、空間の次元は 3 とする。

本章では、 $A_i B_i$ のように、同じ項の中に添え字が組で現れた場合には、それが両方下付き添え字でも、添え字ついて和を取る。また、 $A_i^2 = A_i A_i$ という記法を用いる。

1.1 設定

しばらくはニュートン力学を考え、重力はポテンシャルで与えられるとする。§ 1.5 では一般相対論を考え、重力は計量テンソルで与えられるとする。

K_0 を慣性系とする。座標系 K' は K_0 に対して速度 $\mathbf{V}(t)$ で移動しているとする。更に、系 K は K' と原点 O を共有し、 K' に対して角速度 $\boldsymbol{\Omega}(t)$ で回転しているとする¹⁾。ただし、 K' およ

¹⁾ $\boldsymbol{\Omega}(t)$ は (1.12) で定義される。

び K から見た粒子の速度と $\mathbf{V}(t)$ とは光速に比べて十分小さいとする。 K_0, K', K では、共通の時間座標 t を使う。

$\mathbf{e}_i^{(0)}$ を K_0 の i 番目の座標軸の単位方向ベクトルとする (これは時間に依らない)。これは、 $\mathbf{e}_i^{(0)} \cdot \mathbf{e}_j^{(0)} = \delta_{ij}$ を満たす。 K_0 から見た O の位置を $r_i \mathbf{e}_i^{(0)}$ とする。 $\mathbf{e}_i(t)$ を K の i 番目の単位方向ベクトルとする (これは時間に依存する)。これは、 $\mathbf{e}_i(t) \cdot \mathbf{e}_j(t) = \delta_{ij}$ を満たす。今、

$$\mathbf{e}_i(t) = R_{ji}(t) \mathbf{e}_j^{(0)} \quad (1.1)$$

とする。 $R_{ij}(t)$ は直交行列で、

$$R_{ij} R_{ik} = \delta_{jk}, \quad \det(R_{ij}) = 1 \quad (1.2)$$

である。

\mathbf{A} を任意のベクトルとすると、

$$\mathbf{A}(t) = A_i^{(0)}(t) \mathbf{e}_i^{(0)} = A_i(t) \mathbf{e}_i(t) \quad (1.3)$$

と書ける。このとき、

$$A_i^{(0)} = R_{ij} A_j, \quad (1.4)$$

$$A_i = R_{ji} A_j^{(0)} \quad (1.5)$$

となる。ここで、(1.2) を用いた。

K の座標 x_i は、 K_0 では、

$$X_i = r_i(t) + R_{ij}(t) x_j \quad (1.6)$$

に対応する。ここで、 $r_i(t)$ は O の位置で、 $\mathbf{V}(t) = \dot{r}_i \mathbf{e}_i^{(0)}$ である。ただし、 $\dot{X} = dX/dt$ である。

また、(1.2) より、

$$R_{ji} R_{ki} = \delta_{jk} \quad (1.7)$$

であり²⁾、これを微分して、

$$\dot{R}_{ji} R_{ki} + R_{ji} \dot{R}_{ki} = 0 \quad (1.8)$$

を得る。今、

$$\Omega_{jk}^{(0)}(t) := \dot{R}_{ji} R_{ki} \quad (1.9)$$

と置くと、(1.8) は、

$$\Omega_{jk}^{(0)} + \Omega_{kj}^{(0)} = 0 \quad (1.10)$$

となる。よって、 $\Omega_{jk}^{(0)}$ は反対称であり、

$$\Omega_{jk}^{(0)} = -\varepsilon_{ijk} \Omega_i^{(0)}(t) \quad (1.11)$$

²⁾ R_{ij} を (i, j) 成分とする行列を R とし、その転置行列を ${}^t R$ とすると、(1.2) は ${}^t R R = 1_3$ である (1_3 は 3 次の単位行列である)。この式より、 ${}^t R = R^{-1}$ であり、 $R \cdot {}^t R = 1_3$ も成立する。これが (1.7) である。

の形に書ける。ここで、 ε_{ijk} は完全反対称で、 $\varepsilon_{123} = 1$ である。このとき、角速度を、

$$\boldsymbol{\Omega}(t) = \Omega_i^{(0)}(t) \mathbf{e}_i^{(0)} (= \Omega_i \mathbf{e}_i) \quad (1.12)$$

と置く。

(1.6) で、 X_i, x_j が粒子の位置で、時間の関数だとする。このとき、(1.6) を時間で微分して、

$$\dot{X}_i = \dot{r}_i + \dot{R}_{ij} x_j + R_{ij} \dot{x}_j \quad (1.13)$$

を得る。ここで、

$$\begin{aligned} \dot{R}_{ij} x_j &= \Omega_{ik}^{(0)} R_{kj} x_j \\ &= -\varepsilon_{lik} \Omega_l^{(0)} R_{kj} x_j \end{aligned} \quad (1.14)$$

である。今、

$$x_k^{(0)} := R_{kj} x_j \quad (1.15)$$

とすると、これは

$$\mathbf{x} := x_i \mathbf{e}_i \quad (1.16)$$

を K_0 から見たときの k 成分である。また、 $\mathbf{A} = A_i^{(0)} \mathbf{e}_i^{(0)} = A_i \mathbf{e}_i(t)$, $\mathbf{B} = B_i^{(0)} \mathbf{e}_i^{(0)} = B_i \mathbf{e}_i(t)$ に対して、

$$\mathbf{A} \times \mathbf{B} := \varepsilon_{ijk} A_j^{(0)} B_k^{(0)} \mathbf{e}_i^{(0)} = \varepsilon_{ijk} A_j B_k \mathbf{e}_i \quad (1.17)$$

とする。これを、

$$\mathbf{A} \times \mathbf{B} = (\mathbf{A} \times \mathbf{B})_i^{(0)} \mathbf{e}_i^{(0)} = (\mathbf{A} \times \mathbf{B})_i \mathbf{e}_i \quad (1.18)$$

と書く。このとき、

$$\begin{aligned} \dot{R}_{ij} x_j &= \varepsilon_{ilk} \Omega_l^{(0)} x_k^{(0)} \\ &= (\boldsymbol{\Omega} \times \mathbf{x})_i^{(0)} \end{aligned} \quad (1.19)$$

である。よって、

$$\dot{X}_i = \dot{r}_i + (\boldsymbol{\Omega} \times \mathbf{x})_i^{(0)} + R_{ij} \dot{x}_j \quad (1.20)$$

となる。

今、

$$\mathbf{v}_0 := \dot{X}_i \mathbf{e}_i^{(0)}, \quad (1.21)$$

$$\begin{aligned} \mathbf{v}' &:= \mathbf{v}_0 - \mathbf{V}(t) \\ &= \mathbf{v}_0 - \dot{r}_i \mathbf{e}_i^{(0)} (= v'_i \mathbf{e}_i^{(0)}), \end{aligned} \quad (1.22)$$

$$\mathbf{v} := R_{ij} \dot{x}_j \mathbf{e}_i^{(0)} = \dot{x}_i \mathbf{e}_i (= v_i \mathbf{e}_i) \quad (1.23)$$

と置くと、これらは、 K_0, K', K から見た質点の速度である。このとき、

$$\mathbf{v}_0 = \mathbf{v}' + \mathbf{V}(t), \quad (1.24)$$

$$\mathbf{v}' = \mathbf{v} + \boldsymbol{\Omega}(t) \times \mathbf{x} \quad (1.25)$$

である。 K' での粒子の位置ベクトル $\mathbf{x}' = x_i^{(0)} \mathbf{e}_i^{(0)} =: x'_i \mathbf{e}_i^{(0)}$ と K でのそれ \mathbf{x} は一致する。また、

$$\frac{dx'_i}{dt} = v'_i \quad (1.26)$$

である。

1.2 非慣性系での運動方程式の、ラグランジアンからの導出

まず、 K' での運動方程式を求める。ラグランジアンは、

$$\begin{aligned} L &= \frac{m}{2} \mathbf{v}_0^2 - U \\ &= \frac{m}{2} \mathbf{v}'^2 + m \mathbf{v}' \cdot \mathbf{V} + \frac{m}{2} \mathbf{V}^2 - U \end{aligned} \quad (1.27)$$

である。この式の第3項は位置も速度も含まず、運動方程式に効かない(または、時間だけの関数なので、 $df(t)/dt$ の形に書けるので効かない)。第2項は、

$$m \mathbf{v}' \cdot \mathbf{V} = \frac{d}{dt}(m \mathbf{x}' \cdot \mathbf{V}) - m \mathbf{x}' \cdot \frac{d\mathbf{V}}{dt} \quad (1.28)$$

と書ける。よって、運動方程式に効かない項を落とすと、

$$L' = \frac{m}{2} \mathbf{v}'^2 - m \mathbf{x}' \cdot \mathbf{W} - U \quad (1.29)$$

を得る。ここで、

$$\begin{aligned} \mathbf{W} &:= \frac{d\mathbf{V}}{dt} \\ &= \ddot{\mathbf{r}}_i \mathbf{e}_i^{(0)} =: W_i \mathbf{e}_i = W_i^{(0)} \mathbf{e}_i^{(0)} \end{aligned} \quad (1.30)$$

である。ここで、 $\ddot{X} = \frac{d^2}{dt^2} X$ である。オイラー・ラグランジュ方程式は、

$$m \frac{dv'_i}{dt} = - \frac{\partial U}{\partial x'_i} - m W_i^{(0)} \quad (1.31)$$

となる。右辺第2項は慣性力である。(1.26)より、上式は、

$$m \frac{d^2 x'_i}{dt^2} = - \frac{\partial U}{\partial x'_i} - m W_i^{(0)} \quad (1.32)$$

とも書ける。

次に K での運動方程式を調べる。(1.29)に(1.25)を代入して、

$$L = \frac{m}{2} \mathbf{v}^2 + m \mathbf{v} \cdot (\boldsymbol{\Omega} \times \mathbf{x}) + \frac{m}{2} (\boldsymbol{\Omega} \times \mathbf{x})^2 - m \mathbf{x} \cdot \mathbf{W} - U \quad (1.33)$$

を得る。これより、

$$\frac{\partial L}{\partial x_i} = m(\mathbf{v} \times \boldsymbol{\Omega})_i + m[\boldsymbol{\Omega} \times (\mathbf{x} \times \boldsymbol{\Omega})]_i - mW_i - \frac{\partial U}{\partial x_i}, \quad (1.34)$$

$$\frac{\partial L}{\partial v_i} = mv_i + m(\boldsymbol{\Omega} \times \mathbf{x})_i, \quad (1.35)$$

$$\frac{d}{dt} \frac{\partial L}{\partial v_i} = m \frac{dv_i}{dt} + m \frac{d(\boldsymbol{\Omega} \times \mathbf{x})_i}{dt} \quad (1.36)$$

を得る。よって、オイラー・ラグランジュ方程式は、

$$m \frac{d^2 x_i}{dt^2} = -\frac{\partial U}{\partial x_i} - mW_i + m(\mathbf{v} \times \boldsymbol{\Omega})_i + m(\boldsymbol{\Omega} \times (\mathbf{x} \times \boldsymbol{\Omega}))_i - m \frac{d(\boldsymbol{\Omega} \times \mathbf{x})_i}{dt} \quad (1.37)$$

である。ここで、 $v_i = \dot{x}_i$ を用いた。以下で示すように、

$$\frac{d(\boldsymbol{\Omega} \times \mathbf{x})_i}{dt} = (\boldsymbol{\Omega} \times \mathbf{v})_i + \left(\frac{d\boldsymbol{\Omega}}{dt} \times \mathbf{x} \right)_i \quad (1.38)$$

である。よって、(1.37) は、

$$m \frac{d^2 x_i}{dt^2} = -\frac{\partial U}{\partial x_i} - mW_i + m \left(\mathbf{x} \times \frac{d\boldsymbol{\Omega}}{dt} \right)_i + 2m(\mathbf{v} \times \boldsymbol{\Omega})_i + m(\boldsymbol{\Omega} \times (\mathbf{x} \times \boldsymbol{\Omega}))_i \quad (1.39)$$

となる。右辺の第1項以外は慣性力である。 $2m(\mathbf{v} \times \boldsymbol{\Omega})_i$ の項はコリオリの力と呼ばれ、 $m(\boldsymbol{\Omega} \times (\mathbf{x} \times \boldsymbol{\Omega}))_i$ の項は遠心力と呼ばれる。

(1.38) を示す。(1.38) の左辺は、

$$\begin{aligned} \frac{d(\boldsymbol{\Omega} \times \mathbf{x})_i}{dt} &= \varepsilon_{ijk} \dot{\Omega}_j x_k + \varepsilon_{ijk} \Omega_j v_k \\ &= \varepsilon_{ijk} \dot{\Omega}_j x_k + (\boldsymbol{\Omega} \times \mathbf{v})_i \end{aligned} \quad (1.40)$$

である。ここで、 $\Omega_j = \boldsymbol{\Omega} \cdot \mathbf{e}_j$ より、

$$\dot{\Omega}_j = \frac{d\boldsymbol{\Omega}}{dt} \cdot \mathbf{e}_j + \boldsymbol{\Omega} \cdot \frac{d\mathbf{e}_j}{dt} \quad (1.41)$$

なので、(1.40) の右辺第1項は、

$$\varepsilon_{ijk} \dot{\Omega}_j x_k = \left(\frac{d\boldsymbol{\Omega}}{dt} \times \mathbf{x} \right)_i + \varepsilon_{ijk} \boldsymbol{\Omega} \cdot \frac{d\mathbf{e}_j}{dt} x_k \quad (1.42)$$

である。ここで、

$$\begin{aligned} \frac{d\mathbf{e}_j}{dt} &= \dot{R}_{ij} \mathbf{e}_i^{(0)} \\ &= \Omega_{ik}^{(0)} R_{kj} \mathbf{e}_i^{(0)} \\ &= \Omega_{ik}^{(0)} R_{kj} R_{il} \mathbf{e}_l \\ &= \Omega_{lj} \mathbf{e}_l \end{aligned} \quad (1.43)$$

である。ただし、

$$\Omega_{ij} := \Omega_{ab}^{(0)} R_{ai} R_{bj} \quad (1.44)$$

であり、(1.5) より、

$$\Omega_{ij} = -\varepsilon_{kij} \Omega_k \quad (1.45)$$

となる。(1.42) の第2項において、

$$\begin{aligned} \Omega \cdot \frac{de_j}{dt} &= \Omega_l \Omega_{lj} \\ &= -\varepsilon_{klj} \Omega_k \Omega_l \\ &= 0 \end{aligned} \quad (1.46)$$

である。よって、(1.38) が示された。

1.3 非慣性系での計量

ここでは、 K_0 で $g_{\mu\nu} = \eta_{\mu\nu}$ が成り立つと仮定する。

線素は、

$$ds^2 = -c^2 dt^2 + (dX_i)^2 = g_{\mu\nu} dx^\mu dx^\nu = (\eta_{\mu\nu} + h_{\mu\nu}) dx^\mu dx^\nu$$

である。ただし、 $x^0 = ct$, $x^i = x_i$ である。

(1.6) より、

$$dX_i = dt(\dot{r}_i + \dot{R}_{ij} x_j) + R_{ij} dx_j \quad (1.47)$$

である。よって、

$$\begin{aligned} (dX_i)^2 &= dt^2(\dot{r}_i + \dot{R}_{ij} x_j)^2 + (dx_i)^2 + 2dt dx_k R_{ik}(\dot{r}_i + \dot{R}_{ij} x_j) \\ &= h_{00}(t)(dx^0)^2 + (dx_i)^2 + 2h_{0k}(t) dx^0 dx_k \end{aligned} \quad (1.48)$$

である。ここで、

$$h_{00} = \frac{1}{c^2}(\dot{r}_i + \dot{R}_{ij} x_j)^2, \quad (1.49)$$

$$h_{0k} = \frac{1}{c} R_{ik}(\dot{r}_i + \dot{R}_{ij} x_j) \quad (1.50)$$

である。また、

$$h_{ij} = 0 \quad (1.51)$$

である。 $|h_{\mu\nu}| \ll 1$ である。

1.4 非慣性系での運動方程式の、一般相対論からの導出

1.4.1 コリオリの力以外の慣性力

質点運動方程式は、

$$\frac{d^2 x^i}{d\tau^2} + \left\{ \begin{matrix} i \\ 00 \end{matrix} \right\} \left(\frac{dx^0}{d\tau} \right)^2 + 2 \left\{ \begin{matrix} i \\ 0k \end{matrix} \right\} \frac{dx^0}{d\tau} \frac{dx^k}{d\tau} + \left\{ \begin{matrix} i \\ kl \end{matrix} \right\} \frac{dx^k}{d\tau} \frac{dx^l}{d\tau} = 0 \quad (1.52)$$

である。これから (1.39) を導入する。

$|h_{\mu\nu}| \ll 1$ のとき、

$$\left\{ \begin{matrix} k \\ 00 \end{matrix} \right\} \approx \partial_0 h_{0k} - \frac{1}{2} \partial_k h_{00} \quad (1.53)$$

である。ここで、

$$\partial_0 h_{0k} = \frac{1}{c^2} \left[R_{ik} \ddot{r}_i + \dot{R}_{ik} \dot{R}_{ij} x_j + R_{ik} \ddot{R}_{ij} x_j + \dot{R}_{ik} \dot{r}_i \right], \quad (1.54)$$

$$-\frac{1}{2} \partial_k h_{00} = -\frac{1}{c^2} (\dot{R}_{ik} \dot{r}_i + \dot{R}_{ik} \dot{R}_{ij} x_j) \quad (1.55)$$

である。よって、

$$\left\{ \begin{matrix} k \\ 00 \end{matrix} \right\} \approx \frac{1}{c^2} \left[R_{ik} \ddot{r}_i + R_{ik} \ddot{R}_{ij} x_j \right] \quad (1.56)$$

である。(1.11) より、

$$\begin{aligned} \dot{R}_{ij} &= \Omega_{ik}^{(0)} R_{kj}, \\ \ddot{R}_{ij} &= \dot{\Omega}_{ik}^{(0)} R_{kj} + \Omega_{ik}^{(0)} \dot{R}_{kj} \\ &= \dot{\Omega}_{ik}^{(0)} R_{kj} + \Omega_{ik}^{(0)} \Omega_{kl}^{(0)} R_{lj} \end{aligned} \quad (1.57)$$

であるから、

$$\left\{ \begin{matrix} k \\ 00 \end{matrix} \right\} \approx \frac{1}{c^2} \left[R_{ik} \ddot{r}_i + R_{ik} \dot{\Omega}_{ik}^{(0)} R_{kj} x_j + R_{ik} \Omega_{ik}^{(0)} \Omega_{kl}^{(0)} R_{lj} x_j \right] \quad (1.58)$$

となる。よって、

$$\begin{aligned} m \left\{ \begin{matrix} k \\ 00 \end{matrix} \right\} \left(\frac{dx^0}{d\tau} \right)^2 \\ \approx m c^2 \left\{ \begin{matrix} k \\ 00 \end{matrix} \right\} \\ \approx m \left[R_{ik} \ddot{r}_i + R_{ik} \dot{\Omega}_{ik}^{(0)} R_{kj} x_j + R_{ik} \Omega_{ik}^{(0)} \Omega_{kl}^{(0)} R_{lj} x_j \right] \end{aligned} \quad (1.59)$$

である。

(1.59) の第 1 項は (1.39) の第 2 項に対応している。以下で確かめるように、(1.59) の第 2 項は (1.39) の第 3 項に対応し、(1.59) の第 3 項は (1.39) の第 5 項に対応している。

$R_{ik}\dot{\Omega}_{ik}^{(0)}R_{kj}x_j$ において、 $R_{kj}x_j = x_k^{(0)}$ である。また、

$$\dot{\Omega}_{ik}^{(0)}R_{kj}x_j = -\varepsilon_{ikm}\dot{\Omega}_m^{(0)}x_k^{(0)} = -\left(\mathbf{x} \times \frac{d\boldsymbol{\Omega}}{dt}\right) \cdot \mathbf{e}_i^{(0)} \quad (1.60)$$

である。最後に、(1.5) より、 $R_{ik}\dot{\Omega}_{ik}^{(0)}R_{kj}x_j$ は $-\left(\mathbf{x} \times \frac{d\boldsymbol{\Omega}}{dt}\right)_i$ に対応する。

$R_{ik}\Omega_{ik}^{(0)}\Omega_{kl}^{(0)}R_{lj}x_j$ において、

$$\begin{aligned} \Omega_{ik}^{(0)}\Omega_{kl}^{(0)}R_{lj}x_j &= \varepsilon_{ika}\Omega_a^{(0)}\varepsilon_{klb}\Omega_b^{(0)}x_l^{(0)} \\ &= \varepsilon_{ika}\Omega_a^{(0)}(\mathbf{x} \times \boldsymbol{\Omega})_k^{(0)} \\ &= [(\mathbf{x} \times \boldsymbol{\Omega}) \times \boldsymbol{\Omega}]_i^{(0)} \\ &= -[\boldsymbol{\Omega} \times (\mathbf{x} \times \boldsymbol{\Omega})]_i^{(0)} \end{aligned} \quad (1.61)$$

なので、 $R_{ik}\Omega_{ik}^{(0)}\Omega_{kl}^{(0)}R_{lj}x_j$ は、遠心力に対応する。

1.4.2 コリオリの力

以下のように、(1.52) の第 3 項はコリオリの力と対応する。 $|h_{\mu\nu}(x)| \ll 1$ と $\partial_0 h_{ij} \approx 0$ の下で³⁾、

$$2 \left\{ \begin{matrix} i \\ 0k \end{matrix} \right\} \approx \partial_k h_{i0} - \partial_i h_{0k} \quad (1.62)$$

を得る。今、

$$\omega^j := \frac{1}{2} c \varepsilon^{jkm} \frac{\partial_k h_{i0} - \partial_i h_{0k}}{2} \quad (1.63)$$

とすると⁴⁾、

$$\begin{aligned} 2m \left\{ \begin{matrix} i \\ 0k \end{matrix} \right\} \frac{dx^0}{d\tau} \frac{dx^k}{d\tau} &\approx 2m \varepsilon_{kij} \omega^j \frac{dx^k}{dt} \\ &= -2m (\mathbf{v} \times \boldsymbol{\omega})^i \end{aligned} \quad (1.64)$$

となる。これはコリオリの力に対応する⁵⁾ (コリオリの力を含む)。

以下では、(1.63) の ω^i を求める。(1.50) より、

$$\begin{aligned} \partial_k h_{m0} &= \frac{1}{c} \dot{R}_{ik} R_{im} \\ &= \frac{1}{c} R_{lm} \Omega_{lj}^{(0)} R_{jk} \\ &= \frac{1}{c} \Omega_{mk} \end{aligned} \quad (1.65)$$

³⁾ K_0 で $h_{ij} = 0$ なら、 K でも $h_{ij} = 0$ である。また、 K_0 で $h_{ij} \sim h$ なら、 K では、 $\partial_0 h_{ij}$ は $h\beta$ のオーダーで、無視できる ((1.80))。

⁴⁾ $\varepsilon^{jkm} := \varepsilon_{jkm}$ である。

⁵⁾ K_0 で $g_{\mu\nu} = \eta_{\mu\nu}$ が成立するなら、 $\boldsymbol{\omega} = \boldsymbol{\Omega}$ となる ((1.66))。

である。よって、

$$\omega^i = \Omega_i \quad (1.66)$$

となる。

以上より、(1.52) から (1.39) が導出された。

1.5 K_0 で $h_{\mu\nu} \neq 0$ の場合

K_0 での $h_{\mu\nu} = g_{\mu\nu} - \eta_{\mu\nu}$ を $h_{\mu\nu}^{(0)}$ と書く。 K_0 で、

$$|h_{\mu\nu}^{(0)}| \sim h \ll 1, \quad \partial_0 h_{\mu\nu}^{(0)} \approx 0 \quad (1.67)$$

の場合を考える。ここで、 $h := h_{00}^{(0)}$ である。 \sim はオーダーが同じという意味である。この場合も、座標系変換の式は (1.6) であるとする。 K_0, K', K から見た粒子の速度の典型的な大きさを v と置く。今、 $\beta^2 := v^2/c^2 \sim \mathbf{V}^2/c^2 \ll 1$ を仮定している。さらに、 $h \sim \beta^2$ を仮定し、(1.52) で β^2 のオーダーの項まで残すことを考える。

さて、

$$\begin{aligned} ds^2 &= -c^2 dt^2 + (dX_i)^2 + h_{00}^{(0)} c^2 dt^2 + 2h_{0i}^{(0)} c dt dX_i + h_{ij}^{(0)} dX_i dX_j \\ &= -c^2 dt^2 + (dx_i)^2 + h_{00} c^2 dt^2 + 2h_{0i} c dt dx_i + h_{ij} dx_i dx_j \end{aligned} \quad (1.68)$$

であり、

$$dX_i = dt(\dot{r}_i + \dot{R}_{ij} x_j) + R_{ij} dx_j$$

より、

$$\begin{aligned} h_{00} &= h_{00}^{(0)} + \frac{1}{c^2} (\dot{r}_i + \dot{R}_{ij} x_j)^2 + \frac{2}{c} h_{0i}^{(0)} (\dot{r}_i + \dot{R}_{ij} x_j) \\ &\quad + \frac{1}{c^2} h_{ij}^{(0)} (\dot{r}_i + \dot{R}_{ik} x_k)(\dot{r}_j + \dot{R}_{jl} x_l), \end{aligned} \quad (1.69)$$

$$h_{0k} = \frac{1}{c} R_{ik} (\dot{r}_i + \dot{R}_{ij} x_j) + h_{0i}^{(0)} R_{jk} + \frac{1}{c} h_{ij}^{(0)} (\dot{r}_i + \dot{R}_{il} x_l) R_{jk}, \quad (1.70)$$

$$h_{kl} = h_{ij}^{(0)} R_{ik} R_{jl} \quad (1.71)$$

となる。オーダーは、

$$h_{00}^{(0)} \sim h \sim \beta^2, \quad (1.72)$$

$$\frac{1}{c^2} (\dot{r}_i + \dot{R}_{ij} x_j)^2 \sim \beta^2, \quad (1.73)$$

$$\frac{2}{c} h_{0i}^{(0)} (\dot{r}_i + \dot{R}_{ij} x_j) \sim h\beta \sim \beta^3, \quad (1.74)$$

$$\frac{1}{c^2} h_{ij}^{(0)} (\dot{r}_i + \dot{R}_{ik} x_k)(\dot{r}_j + \dot{R}_{jl} x_l) \sim h\beta^2 \sim \beta^4, \quad (1.75)$$

$$\frac{1}{c} R_{ik} (\dot{r}_i + \dot{R}_{ij} x_j) \sim \beta, \quad (1.76)$$

$$h_{0i}^{(0)} R_{jk} \sim h \sim \beta^2, \quad (1.77)$$

$$\frac{1}{c} h_{ij}^{(0)} (\dot{r}_i + \dot{R}_{il} x_l) R_{jk} \sim h\beta \sim \beta^3, \quad (1.78)$$

$$h_{kl} \sim h \sim \beta^2 \quad (1.79)$$

である。また、 $\partial_0 h_{\mu\nu}^{(0)}$ が $h\beta$ 程度以下だとすると、

$$\partial_0 h_{kl} \sim h\beta \sim \beta^3 \quad (1.80)$$

である。

(1.52) で β^2 のオーダーの項まで残すと、(1.39) に重力ポテンシャルによる項を加えたものが得られる。 $h_{00}^{(0)}$ が重力ポテンシャルである。